

ふれあい

新田誠二

「今日は大丈夫だろうか。私は朝起きると左右の足のふくろはぎをさすり、異常がないか確認する。これは私の日課の一つである。そして布団から抜け出し、立ち上がる。左右のふくろはぎの部分が重い。この症状はずいぶん前から感じていた事である。デイサービスで自転車こぎのプログラムを終えた時には棒の様になる。」

ヘルパーさんは、これを聞いてこう言うのだ。「新田さん、足がしっかりしている人は、頭がおとろえているし、頭のしっかりしている人は、足がおとろえていますよ。」仕事から、沢山の人と接することから、分ったことなのでしょう。

こう言われて、私は、苦笑せざるをえなかったのです。

だが、テレビのコマーシャルでは、高齢者の足の筋力の衰えだと説明している。

さて、私には障害者手帳二級が交付されている。八十二才の老人である。どうして障害者になったのが、今になっても残念に思う。

それは、ある秋の日のことだった。歩いていたが、急に汗が流れ意識がなくなり、顔を道路にぶつけた。気がついた時は、救急車の中だった。病院では、てんかんの病名を告げられた。治療のため入院となった。

それ以来、精神的にもまいってしまい、他の心の病で入院生活を体験することになった。退院してから、デイケアに通うことになった。

障害者になった私は、デイケアで定めたプログラムに参加し、リハビリに専念。

プログラムは熟慮された内容で、運営はスタッフが行っている。勿論、スタッフは健常者であり、国家試験に合格した人達である。

ここで私は、障害者同士がふれあいを持つことと、スタッフの人とのふれあいを体験し

ている。

そして、障害者どうしのふれあいで社会生活に必要な心配りや理解と、プログラム進行上のルールなどが知らされる。

スタッフは、プログラム進行の調整や助言などにおわれている。

プログラムは、年にいくどか入れ替りがあり、私達に飽きがない様に工夫している。

また、次々に新しい角度から考えられたプログラムが用意されていくが、これは、ここの特長だろう。

なんといても、他のデイケアと違うのは、デイケア参加者が殆どといっていいぐらい、卓球を楽しんでいる。集団生活で自立つことがない人も例外ではない。

私は、いくつか学校に勤めたがこのように活動する人達を見たことがない。

強制されて卓球をしているのではない。

自由意思で楽しんでいるのだ。眼を見れば分かる。生き生きとしているから。

スタッフとデイケア参加者が、一緒になっ  
ている。障害者と健常者が分けられてい  
るのではなく、一つになっ  
て楽しんでいる。

私も出来ることなら楽しみたいが、ふ  
らつく足では危険すぎる。

さて、ここは何故ふれあい  
が成功しているのか。こ  
この状態と同じ様な様  
子が見られるところも  
ある。

デイサービスの施設である。こ  
この管理者は、スタッフ  
の先頭に立ちよく動く。

そして、介護の利用者を皆おなじ  
様に声をかけ励ます。だから、  
スタッフは、誰彼となく  
同じ様に接する。店は明  
るい雰囲気になっ  
ている。

ところで、デイケアと  
デイサービスの施設  
では、ふれあいのため  
どの様なことを大切  
に思っているのだろうか。

私は、一期一会の心  
が活きているのだと思  
う。だから、この心で  
障害者と健常者の人達  
がふれあえば、社会は  
素晴らしい所となる。